

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

#### (4) 両生類

両生類は日本には有尾目 32 種、無尾目 43 種 5 亜種が生息し、埼玉県からはこれまでに有尾目 5 種、無尾目 13 種計 18 種が記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから外来種（ウシガエル、ヌマガエル）を除いた 16 種を対象に本県における生息状況を調査した結果、その約 94%にあたる 15 種をレッドリスト掲載種とした。

これまでの両生類の掲載種数の変遷をみると、初版は 11 種、改訂版の 13 種、前版での 14 種、そして本書の 15 種と、絶滅を危惧すべき状況にある両生類は確実に増加している。近年になってから急速に減少がみられたアズマヒキガエルが本書で初掲載となったことにより、ニホンアマガエルを除くすべての両生類がレッドリスト掲載種となった。初版刊行時から本書に至るまでの変遷で、生息状況が好転してレッドリストから外れた種やレッドランクが下がった種は皆無であり、多くの種でレッドランクが上昇している。

両生類は水域と陸域を行き来するため、生活史には多様な環境を必要とし、環境悪化の影響を受けやすい。バブル期のゴルフ場などの乱開発はアカハライモリやトウキョウサンショウウオの激減を招き、その後も宅地・工業団地・幹線道路造成などの大規模開発が県内各地でおこなわれ、その影響は深刻化を増している。ヤマアカガエル、ニホンアカガエル、シュレーゲルアオガエルの重要な産卵場所である丘陵地の谷戸では水田の耕作放棄による乾燥化が進行し、個体数の減少を招いている。トウキョウダルマガエルの重要な生息場所である平地の水田は、開発による消失だけでなく、水田転作による畑地化や圃場整備による用排水路のコンクリート化の影響、さらに中干しによる落水が幼生の死亡につながり、個体数減少の原因となっていると考えられる。河川沿いに生息するカジカガエルやツチガエルも河川改修による三面護岸化や直線化の影響を受け、山地溪流に生息するサンショウウオ類も新たな林道や砂防堰堤の造成、森林伐採による乾燥化などの影響を受けていると考えられる。調査した両生類の多くの種について生息環境が悪化していることが明らかになった。

また、近年の新たな問題として、外来種、特にアライグマによる捕食は深刻さを増しており、2～3月に産卵場所に集まるトウキョウサンショウウオ、ヤマアカガエル、ニホンアカガエルに対する捕食圧は個体群の維持に大きなダメージとなっている。

前版刊行時の 2008 年頃に新たな脅威として話題になったカエルツボカビについては、国内に常在していることがわかっている（環境省, 2011）が、本県では集団死などの被害は報告されていない。しかし代わって集団死を引き起こす可能性のあるラナウイルスによる感染症の発症が国内で確認され、研究機関によるモニタリングが続けられている（環境省, 2011）。このほかにも、気候変動が産卵習性に影響を及ぼしていることが示唆されるなど、両生類を取り巻く状況は一層厳しいものになっている。

[付記] 次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、前田憲男ら（1999）、松井正文（2016）、千石正一ら（1996）、環境省（2014）を参照した。また、種数については日本産爬虫両棲類標準和名リスト（日本爬虫両棲類学会 2016 年 11 月 27 日版）を参照した。

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
昆虫類  
甲殻類  
多足類  
クモ目  
軟体動物  
扁形動物

【目名・科名】 有尾目イモリ科  
 埼玉県(2018) CR 環境省(2014) NT

【和名】 **アカハライモリ**

【学名】 *Cynops pyrrhogaster* (Boie) 指定状況 県内希少野生動物種

---

【形態】 全長 オス 70～115mm、メス 80～140mm

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 小川、農業用水路など流れの緩い流水域から、池沼、湿地、水田など止水域にまでおよび、湿地から人為的な環境である里山まで様々な環境に適応している。

【県内での生息状況】 秩父地方、入間地方、比企地方などの台地・丘陵帯から低山帯に生息地が点在しているが、個体数は少なく危機的状況にある。かつては低地帯まで分布していた記録があるが、近年は全く確認できない。生息環境が悪化する要因として、護岸工事されていない小川の減少、水田の暗渠排水工事による乾田化、用排水路のコンクリート化が挙げられる。また、上陸前の幼生は中干しなどの落水による死滅も減少の原因に挙げられる。

【特記事項】

【目名・科名】 有尾目サンショウウオ科  
 埼玉県(2018) EN 環境省(2014) VU

【和名】 **トウキョウサンショウウオ**

【学名】 *Hynobius tokyoensis* Tago 指定状況 -

---

【形態】 全長 80～130mm 頭胴長 50～70mm

【国内分布】 本州（群馬県を除く関東、福島県南部）

【主な生息環境】 低山や丘陵地の雑木林などに生息し、谷戸に散在する水田やその水路、地下水が出ている水たまりなどに2～4月ごろ産卵する。幼生は水田や流れの緩い水路などに生息し、上陸後は落ち葉などが溜まった林床などで生活するため、隠蔽性が強くめったに人の目に触れることはない。

【県内での生息状況】 秩父地方、入間地方、比企地方、大里地方などの低山帯から台地・丘陵帯にかけて生息している。道路、宅地、工業団地など開発や都市化の進行により、急速に個体数を減らしている。特に大里地方は生息環境の悪化が著しく、危機的状況下にある。入間地方や比企地方では都心までの交通の利便性がよい地域では谷戸などの生息環境の消失・悪化が進んでいる。また、地下水源の枯渇も減少の原因になっている。

【特記事項】 アライグマやアメリカザリガニによる捕食、販売目的の業者等による乱獲も影響が大きい。

【目名・科名】 無尾目アカガエル科  
 埼玉県(2018) EN 環境省(2014) -

【和名】 **ツチガエル**

【学名】 *Glandirana rugosa* (Temminck et Schlegel) 指定状況 -

---

【形態】 体長 オス 37～46mm、メス 44～53mm、メスが明らかに大きい

【国内分布】 北海道(※)、本州、四国、九州 ※北海道の個体群は国内移入とされる

【主な生息環境】 低山、丘陵地の流れの緩やかな河川、池沼、水田、湿地など多様な環境に生息し、水辺からはほとんど離れない。繁殖期は長く5～9月頃までおよび、卵数10～60個ほどの小さな卵塊を複数回に分けて産卵する。幼生はひと冬越した翌年に上陸するため、秋-冬にかけて水源の枯渇しない繁殖場所が必須となる。

【県内での生息状況】 秩父地方、入間地方、比企地方の低山帯から台地・丘陵帯にかけて生息している。かつては低地帯でもみられたが、近年は記録が途絶えている。比企地方の生息条件の良い河川中流域が分布の中心となるが、秩父地方、入間地方では生息地が限定され、個体数も少ない。幼生で冬を越すため、秋-冬にかけて水源の枯渇が減少の大きな要因となる。水田では圃場整備による暗渠排水工事と用排水路のコンクリート化や中干しなどの落水、河川では護岸や直線化工事によるわんどや流れの緩い淵の消失は本種の繁殖に影響を及ぼす。

【特記事項】

【目名・科名】	有尾目サンショウウオ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	NT
【和名】	<b>ヒダサンショウウオ</b>				
【学名】	<i>Hynobius kimurae</i> Dunn	指定状況	-		
【形態】	全長 101 ~ 184mm 頭胴長 57 ~ 97mm				
【国内分布】	本州（関東以西）				
【主な生息環境】	山地の森林に生息し、幅が狭く水量の少ない溪流や源流部などで2~3月頃産卵する。幼生は流れの緩い溜まりなどにとどまり、県内ではひと冬越した翌年に上陸する。上陸後は林床に生息していると考えられ、水辺に移動する繁殖期以外確認することは困難である。				
【県内での生息状況】	亜高山帯から低山帯の山地に生息している。分布の中心は秩父地方であるが、入間地方、比企地方でも生息が確認されている。しかし生息地は局所的であり、個体数も少ない。生息地は人家から離れた山地が主で絶滅のリスクはそれほど高くないが、林道や砂防堰堤の造成、森林伐採等による生息環境の改変や乾燥化は減少の要因となる。				
【特記事項】	成体は美しいため、販売目的の乱獲も疑われる。				

【目名・科名】	無尾目アカガエル科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
【和名】	<b>ニホンアカガエル</b>				
【学名】	<i>Rana japonica</i> Boulenger	指定状況	-		
【形態】	体長 オス 34 ~ 63mm、メス 43 ~ 67mm   メスが明らかに大きい				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	丘陵地の雑木林の林床、河川敷内の湿地などに生息し、2~4月頃湿田、湿地、浅い池沼、小さな水たまりなどに産卵する。河川敷内の湿地のような不安定な環境にも適応するが、乾燥化や産卵場所の消失などの生息環境の悪化の影響を受けやすい。				
【県内での生息状況】	台地・丘陵帯から低地帯にかけて広くに生息しているが、秩父地方には生息していない。台地・丘陵帯では耕作放棄等による湿田の減少、道路新設や宅地や工業団地の造成により生息地が減少している。低地帯では都市化、様々な開発により生息地の分断化がかなり進行し、個体数はごく限られている。安定的に繁殖できる生息地は少なくなり、厳しい状況下におかれている。また、アライグマによる捕食も確認されるなど、個体数の減少の原因が多岐にわたっている。				
【特記事項】	入間地方、比企地方、大里地方では近縁のヤマアカガエル <i>R. ornativentris</i> と同所的に生息している場所がある。				

【目名・科名】	無尾目アオガエル科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
【和名】	<b>モリアオガエル</b>				
【学名】	<i>Rhacophorus arboreus</i> (Okada et Kawano)	指定状況	市町村指定天然記念物（飯能市）		
【形態】	体長 オス 42 ~ 60mm、メス 59 ~ 82mm   メスが著しく大きい				
【国内分布】	本州				
【主な生息環境】	山地や丘陵地などの樹林内に生息し、5~7月頃に産卵する。産卵は森林に隣接した池沼やコンクリートの調整池などで、人家の庭池も使われることがある。また、まれに防火水槽や水田も産卵に使われる。樹上生活をするためか、産卵期以外での成体の確認は稀である。				
【県内での生息状況】	秩父地方、入間地方、比企地方の低山帯から台地・丘陵帯に生息している。分布の中心は秩父地方であり、入間地方、比企地方では個体数は少ない。特に比企地方では局所的にしか生息が確認されていない。県内では樹林に囲まれた良好な産卵場所は少なく、不安定で小規模な個体群が点在していると考えられる。また、人為的な放流も考えられ、注意を要する。				
【特記事項】	樹上に産卵するクリーム色の特徴的な卵塊や、成体は大型で黄緑色の体色は季節の風物詩として新聞等で取り上げられるなど一般の知名度は高い。				

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
昆虫類  
甲殻類  
多足類  
クモ目  
軟体動物  
扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
昆虫類  
甲殻類  
多足類  
クモ目  
軟体動物  
扁形動物

【目名・科名】 有尾目サンショウウオ科  
埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) NT

【和名】 **ハコネサンショウウオ**

【学名】 *Onychodactylus japonicus* (Houttuyn) 指定状況 -

---

【形態】 全長 130～190mm 頭胴長 70～90mm

【国内分布】 本州（東南北部から中国地方）

【主な生息環境】 山地の樹林帯のガレ場や湿った林床などに生息し、生息地の標高は2,000 m程度までおよぶ。溪流の源流部の伏流水下などに産卵し、容易に人手がおよばない場所が使われることから卵囊の発見は困難である。幼生は水温が低く安定した水量の豊富な溪流などに生息し、普段は石の下などに隠れている。

【県内での生息状況】 亜高山帯から低山帯の山地に生息している。分布の中心は秩父地方である。入間地方、比企地方でも生息が確認されているが、生息地は局所的である。生息場所は人家から離れた山地が主で絶滅のリスクはそれほど高くないが、林道や砂防堰堤の造成、森林伐採等による生息環境の悪化や林床の乾燥化は減少の要因となる。

【特記事項】 幼生期間は約3年と長く、上陸後も肺を持たないのが特徴である。

【目名・科名】 無尾目ヒキガエル科  
埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -

【和名】 **アズマヒキガエル**

【学名】 *Bufo japonicus formosus* Boulenger 指定状況 -

---

【形態】 体長 オス 43～161mm、メス 53～162mm 高標高地では小型化する

【国内分布】 北海道（※）、本州（近畿以東） ※北海道の個体群は国内移入とされる

【主な生息環境】 山地から平地まで幅広く分布し、おもに林床で生息している。山地の樹林帯から都市公園や人家近くの緑地でも確認され、様々な環境に適応している。産卵は3～5月頃に水深の浅い池沼などでおこなわれ、長いひも状の卵塊を産む。産卵期以外は水辺から離れた場所でも確認される。

【県内での生息状況】 亜高山帯から低地帯にかけて、山地から都市公園まで広く分布する。台地・丘陵帯から低地帯にかけて近年急速に個体数を減らしている。道路新設や宅地や工業団地造成などの大規模開発による生息地の減少がみられるだけでなく、農道・林道造成などによる生息地の分断や、産卵池の護岸など比較的小規模な開発でも影響を受けていることが考えられる。アライグマによる捕食も疑われ、個体数の減少の原因が多岐にわたっている。

【特記事項】 個体数減少により、産卵池に多くのオスが集まる「カエル合戦」がほとんど見られなくなっている。

【目名・科名】 無尾目アカガエル科  
埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) NT

【和名】 **トウキョウダルマガエル**

【学名】 *Pelophylax porosus porosus* (Cope) 指定状況 -

---

【形態】 体長 オス 39～75mm、メス 43～87mm メスが明らかに大きい

【国内分布】 本州（東北の太平洋側[岩手県・宮城県・福島県]、関東地方、新潟県と長野県の一部）

【主な生息環境】 丘陵地から平地の水田と、周辺の水路や浅い池沼、河川敷の湿地などに生息し、水辺からほとんど離れない。産卵は水田の湛水期である5～7月頃におこなわれ、産卵場所は水田にほぼ依存している。

【県内での生息状況】 低山帯から低地帯にまで広く分布しているが、分布の中心は低地帯に広がる水田である。道路新設や宅地や工業団地造成などの大規模開発による水田の減少、圃場整備による暗渠排水工事や用排水路のコンクリート化などの影響を受け生息地が減少している。特に熊谷市周辺などでおこなわれている二毛作水田では減少著しく、湛水が6月中下旬以降と遅く産卵期のピークを過ぎているだけでなく、中干しなどによる落水も上陸前の幼生の死亡につながり、個体数減少の原因となっている可能性がある。

【特記事項】

【目名・科名】 無尾目アカガエル科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
【和名】 <b>ナガレタゴガエル</b>				
【学名】 <i>Rana sakuraii</i> Matsui et Matsui	指定状況			-
【形態】	体長 オス 38～56mm、メス 49～69mm    メスが明らかに大きい			
【国内分布】	本州（関東以西）			
【主な生息環境】	山地の溪流沿いの林床などに生息している。産卵は2～4月頃に比較的水量の豊富な溪流の石の下などでおこなわれる。幼生はほぼ卵黄だけで成長し、6月頃までには上陸する。溪流の石の下などで越冬するため、産卵期前にまとまって確認されることがある。			
【県内での生息状況】	秩父地方、入間地方、比企地方の山地帯から低山帯にかけて生息している。分布の中心は秩父地方で、入間地方、比企地方と比べて個体数も多い。生息場所は人家から離れた山地が主で絶滅のリスクはそれほど高くないが、林道造成、砂防堰堤工事、森林伐採等による生息環境の悪化や林床の乾燥化は減少の要因となる。			
【特記事項】	近縁種タゴガエル <i>R. tagoi tagoi</i> とは入間地方で生息地が重なっているが、産卵行動、産卵環境が異なる。			

【目名・科名】 無尾目アオガエル科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
【和名】 <b>カジカガエル</b>				
【学名】 <i>Buergeria buergeri</i> (Temminck et Schlegel)	指定状況			-
【形態】	体長 オス 37～44mm、メス 43～87mm    メスが著しく大きい			
【国内分布】	本州、四国、九州			
【主な生息環境】	山地や丘陵地の溪流沿いの河畔林などに生息し、4～8月頃に産卵する。産卵場所は比較的なだらかでゴロゴロした石の多い溪流を好み、浅瀬の石の下に粘着性の卵塊を産む。幼生は河川の浅く流れの緩いたまりなどで育ち、夏から秋にかけて上陸する。			
【県内での生息状況】	山地帯から台地・丘陵帯にかけて生息している。分布の中心は秩父地方、入間地方、比企地方で、大里地方、児玉地方の一部でもみられる。人家に近い溪流でもみられるが、三面護岸や直線化など河川改修、河畔林の伐採により生息環境は悪化している。入間地方や大里地方などでは宅地化など開発の影響も考えられる。			
【特記事項】	美しい鳴き声は古くから楽しまれ、昭和40年代ごろまで、長瀨町では土産物として売られていたことがある。			

【目名・科名】 無尾目アカガエル科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
【和名】 <b>ヤマアカガエル</b>				
【学名】 <i>Rana ornativentris</i> Werner	指定状況			-
【形態】	体長 オス 42～60mm、メス 36～78mm    メスが明らかに大きい			
【国内分布】	本州、四国、九州			
【主な生息環境】	丘陵地の人家に近い里山から、山地の森林奥深くまで林床や溪流の周りに生息している。産卵期は地域や標高などによって差があり、埼玉県内ではだいたい2～4月頃である。山林に隣接した湿田、湿地、浅い池沼、小さな水たまりなどが産卵に使われる。			
【県内での生息状況】	秩父地方、入間地方、比企地方、大里地方の山地帯から台地・丘陵帯にかけてに生息している。台地・丘陵帯では耕作放棄等による湿田の減少、道路新設や宅地や工業団地の造成により生息地が減少している。また、アライグマによる捕食も確認され、特に人里近くまたは里山の生息地は個体数の減少がみられる。人工的な環境であるが、湿性植物園が本種の良好な繁殖地になっている例がみられる。			
【特記事項】	入間地方、比企地方、大里地方では近縁種ニホンアカガエル <i>R. japonica</i> と同所的に生息している場所がある。			

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
昆虫類  
甲殻類  
多足類  
クモ目  
軟体動物  
扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
昆虫類  
甲殻類  
多足類  
クモ目  
軟体動物  
扁形動物

〔目名・科名〕 無尾目アオガエル科  
埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

〔和名〕 シュレーゲルアオガエル

〔学名〕 *Rhacophorus schlegelii* (Günther) 指定状況 -

---

【形態】 体長 オス 32～43mm、メス 43～53mm      メスが著しく大きい

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低山から丘陵地にかけて雑木林などに生息している。3～5月頃に雑木林など生息地に隣接した水田の畦や湿地に泡状の卵塊を産む。主たる産卵場所である水田と雑木林などの生息地双方の場所が必要であり、里山環境に適応した種である。

【県内での生息状況】 低山帯から低地帯にまで広く分布しているが、分布の中心は谷戸田が散在する台地・丘陵帯である。開発の進行により生息適地がほとんど失われてしまった低地帯での個体数はわずかである。また、水田は耕作放棄による減少、圃場整備による乾燥化や畦のコンクリート化、湛水期が6月以降にまでずれ込み産卵期と合わなくなる例など個体数の減少要因が挙げられ、台地・丘陵帯でも個体数は減少している。

【特記事項】

〔目名・科名〕 有尾目サンショウウオ科  
埼玉県(2018) DD 環境省(2014) NT

〔和名〕 クロサンショウウオ

〔学名〕 *Hynobius nigrescens* Stejneger 指定状況 -

---

【形態】 全長 120～190mm      頭胴長 60～80mm

【国内分布】 本州（福井県以東）

【主な生息環境】 山地から丘陵地にかけて生息し、2,500 mを超える高山から海岸近くにまでおよぶ。産卵期は地域や標高などによって差があり、2～7月頃までと幅がある。水温が低く水位の安定した湖沼や湿地などに産卵し、流水や伏流水中には産卵しない。幼生はひと冬越した翌年に上陸し、上陸後は林床に生息していると考えられ、水辺に移動する繁殖期以外確認することは困難である。

【県内での生息状況】 秩父地方の亜高山帯から低山帯での古い生息記録（岡田，1950など）があるが、近年は全く報告されていない。過去に生息していたことの決め手になるような記録はなく、特に他種との判別が容易なアケビ型の卵囊の記録がない。また、過去に本種の記録された地点の周辺には本種の産卵に適した湖沼環境は確認できず、本種の生息域として飛び地であるため、誤同定の可能性がある。

【特記事項】 関東地方では群馬県北部、栃木県北部に生息している。

〔目名・科名〕 無尾目アカガエル科  
埼玉県(2018) DD 環境省(2014) -

〔和名〕 タゴガエル

〔学名〕 *Rana tagoi tagoi* Okada 指定状況 -

---

【形態】 体長 オス 30～58mm、メス 31～54mm

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 山地の溪流沿いの林床などに生息し、3～6月頃に湧水の染み出ている岩の隙間や割れ目、伏流水中などに産卵する。幼生は餌を食べずに卵黄のみで上陸できる。産卵や幼生の生育に適した、水温・水量の安定した湧水環境が必要となる。

【県内での生息状況】 秩父地方、入間地方の山地帯から低山帯にかけて生息記録がある（松本，1992）。秩父地方での記録は山地帯に限られるが、入間地方では低山帯でも確認されている。十分に調査されていないことから不明な点が多いが、生息地は限定されていると考えられる。生息場所は人家から離れた山地が主で絶滅のリスクは高くないが、林道や砂防堰堤の造成、森林伐採等による生息環境の悪化や林床の乾燥化は減少の要因となる。

【特記事項】 近縁種ナガレタゴガエル *R. sakuraii* とは入間地方で生息地が重なっているが、産卵行動、産卵環境が異なる。